

浙江越劇の現在

——第3回中国越劇芸術フェスティバルより——

Current of the Zhejiang Yueju :

Review of the Third Chinese Yueju Art Festival

中山文
Fumi Nakayama

はじめに

2014年10月11日から20日まで、文化部と浙江省人民政府主催の第3回中国越劇芸術節が浙江省温州市で開催された。12日の開幕式から28日の閉会式まで、17日間の会期で計26本が上演された。筆者は前半のみの参加ではあるが、9日間で11本を観劇することができた。

本芸術節は越劇100周年の2006年に第1回が紹興で開かれて以来、4年に1度、浙江省の各都市持ち回りで開催されてきた。第1回については、筆者が立教大学の細井氏との共同研究として、浙江越劇の現状を報告した^①。だが2010年に寧波で開催された第2回には参加できず、今回は8年ぶりのフェスティバル参加となった。この8年間で、浙江越劇の何がどのように変化したのだろうか。後半上演の12本を見ることができなかったのは残念だが、大きな収穫を得た10日間であった。以下に単見した11本の報告と動向分析および考察を付す。参加作品、劇団、作家、演出家、主要俳優などの一覧は資料1に記した。

I. 個別作品のあらすじと所感

①『大唐驪歌』温州市越劇演芸中心（温州市越劇団）

〈あらすじ〉

舞台は唐代の長安。灯籠祭りの夜、太平王女はエリート禁軍の將軍・薛紹に一目惚れをする。母である皇后・武則天は愛娘の希望を叶えるために薛紹を婿に迎えようとするが、彼にはすでに妻子があった。武則天はひそかに薛紹の愛妻に死を賜ると、薛紹には「自分のため、一族のために口外せぬよう」迫り、娘との結婚を承諾させる。結婚後、薛紹の心は冷え切ったまま武則天の強権に無言の抗議を続ける。詳細を知らない太平王女は、けなげに尽くして冷たい夫との距離を埋めようとするが、夫はうちとけてはくれず、寂しい日々が続く。ある日彼女は薛紹が寺に隠して養育していく

た息子・葉児の存在を知り、自分たちが引き取ろうと提案する。6年後、薛紹は次第に太平王女の無垢で誠実な愛に癒され、心を開いていく。だがその変化を前妻の姉から不誠実と責められ、自責の念を募らせる。唯一の心掛かりだった息子の将来が保証されると、自殺して板挟みの苦悩に終止符を打つ。夫の死によって初めて真相を知った王女は母に問う。「美しい人生のスタートがあなたの手の中で壊された。これがお母さんの愛情なの？」（写真①）

〈所感〉

「母からの自立」をテーマにした越劇作品の誕生である。武則天は太平王女の幸福を、何よりも望んでいる。娘には「自分のような血なまぐさい人生ではなく、いつも朗らかで太平に暮らすこと」を望む愛情深い母親である。と同時に、娘の幸福のためには他の女性や家族を平気で犠牲にできる権力を持った強い母親である。

太平王女もまた母の力を知り、依存している。葉児の素性を知ると、「私は武則天の娘。他の人間には何も言わせない。3人で暮らそう」と提案し、母が与えてくれる特権で、自分たちの幸福を守ろうとする。それはどんな望みも許される生き方に甘えてきた彼女の弱さでもある。

ラストシーンで夫の亡骸を抱きしめる娘に「家に帰ろう」と母は話しかける。「どこの家に帰るというの？ 私たちが帰る家は別々なのに」と娘は答える。しばし沈黙の後、家来に支えられた母は娘に背を向け、その場を去っていく。背を向けあう2人。これまで母に依存してきた可愛い太平王女が、この時初めて孤独に耐える強さを見せる。その毅然とした姿は、武則天にそっくりである。

相手が自分の幸福を最優先に考えてくれると信じているだけに、娘が母から自立することは難しい。21世紀のノラにとって、最大のテーマは夫ではなく母からの自立であり、それは愛する男性を失わねば達成できないほど困難なものなのだ。ここに、長年の一人っ子政策と急激な経済成長が生んだ「母と娘の癒着」物語が浮かんで見えた。

本作の作家張思聰の曹禺戯劇賞受賞『荊釵記』（1999年）では、嫁と姑に築かれたシスターフッドが印象的だった²⁾。今回もまた、母と娘の新しい一面が表現されたことに、一流越劇作家のアンテナの鋭さを感じた。

薛紹役の黄燕舞は一級俳優。すっきりとした容貌で情熱的な高音が魅力の徐派の実力者だ。太平王女役の邵夢嵐はチャーミングで、一途な姿は涙を誘う。だが、本作の影の立役者は武則天役の鄭曼莉である。彼女は第18回梅花賞を受賞した老生（成熟した男性役）俳優だが、今回初の女性役ということで話題を呼んだ。身についた特権と専横が生んだ母親としての不幸。後悔、自責、矜持。その演技には老生俳優のキャリアが十分に生かされていた。張思聰は執筆時から、この役をできるのは彼女しかいないと考えていたという。最後の5分のためにあった2時間半、と感じさせるエンディングだった。

②『賀双卿』（福鼎市越劇団）

〈あらすじ〉

階層にふさわしからぬ美と才を持って生まれたために、人生の非情を知らされる女性の不幸を描

く。両親を亡くした賀双卿は、叔父の命に従い年の離れた文盲の農夫に嫁ぐ。詩を吟じ賦を読む病弱な体に農作業は耐えられず、夫・姑から虐待を受ける。不遇の才人史震林が彼女の才能と美貌に心を奪われ、その不運を惜しみ、互いに砂漠のオアシスのような存在となる。だが男には妻が、女には夫がいる。互いに遠くから眺め、魂の知己となる。口にはできないプラトニックな愛情を尽くすが、無常の世間には抵抗できない。薄幸の美女は天を恨み、知己はその思いを書に記すしかなかった。

〈所感〉

川辺で本の貸し借りをする2人をのぞき見た夫は、「俺の嫁に手を出すな」と暴れる。深夜まで読書にふける妻からは同衾を拒まれ、農夫仲間からは「寝取られ男」と噂され、母からは「お前がしっかりしないからだ」と責められる。いらだちから本を燃やしてしまうと、妻は「高い志を望んだのに、こんなことになるなんて」と泣き叫んで大騒ぎ。村中の笑い物となり、夫はショックで心を病む。こうなれば、妻と夫のどちらが封建的結婚の被害者なのかわからない。

「鶏に嫁げば鶏に従え」と嫁をいびる姑と「他家の嫁にうつつをぬかさず科挙の勉強に励め」と強いる史震林の母は、いずれも若い2人を苦しめる悪者として描かれる。ラストシーンでは「守節」「貞烈」「三従」「四徳」と書かれた4本の白い垂れ幕が天井から下りてくる。賀双卿はそれを引きちぎり、「どこが間違っていたの？ 何が悪かったの？」と錯乱する（写真②）。

幕間に行われる農民たちのダンスや掛け合いがコミカルだった。だが、最終場に覆面をかぶって登場する姿はたいへん気味悪く、閉ざされた農村社会に存在する、陽気なうわべに隠された悪意がうまく表現された。

肝心の主役たちは自分の不幸な運命を嘆いているだけで、いつまでたっても2人の人生が絡みあわない。プラトニックラブよりも、孤独感にさいなまれる賀双卿の夫や息子の行く末を心配する2人の母親の心情に共感した。

賀双卿（1715–1735）は、江蘇の人。同郷の人が書いた「西青散記」に残る。詩を紙ではなく木の葉に書いたので、その作品は散逸多く、14首を残すのみ。それを象徴する大きな緑葉が天井から下がった舞台美術が印象的。観客は70歳以上の老婦人が目立った。

③『海蘭花』（舟山市芸術劇院・小百花越劇団）

〈あらすじ〉

辺境の貧しい孤島が舞台。向学心のない子供たちと教育に無関心な保護者を相手に、小学校校長の楊如蘭は日々奮闘している。授業についていけない子供には放課後も家庭訪問をして補習をし、遠距離恋愛に悩む同僚の相談に乗る。だが最大の問題は、自分の家庭にある。彼女自身、子供と夫の世話を母に任せて週1度帰宅するだけの単身赴任生活が続いているのだ。ある日、夫に杭州へ転職するチャンスが訪れた。だが彼女の心は島の子供たちにあり、夫の栄転を素直に喜べない。夫との葛藤の後、仕事を選んだ彼女はやがて癌に倒れる。子供たちは師恩に報いるべく学力向上を誓い、入院に向かう彼女を見送る。

〈所感〉

離れ小島で教育に心血を注ぐ教師の物語。だが、心に迫るのは仕事と家庭生活に引き裂かれる女性としてのつらさである。夫が「自分と仕事のどちらを選ぶのだ！」と迫り、息子も父に肩入れする。自分は老母・故郷・島の子供たちと別れられるのか？ 悩む娘の言葉に、母は微笑みながら耳を傾ける。「あなたがやりたい夢ならば、やる価値がある。行きなさい！」娘の望みを察して、背中を押してくれる母との共闘関係。仕事と家庭の両立は、21世紀の中国女性にとっても決してたやすいものではないのだと知らされた（写真③）。

〈備考〉

ご当地舟山市へのオマージュ作品。セリフの端々に、「太刀魚、海蘭花、おいしいものやきれいなものがたくさんあるぞ」というお国自慢を感じさせて、微笑ましい。楊如蘭役の劉南燕が優秀俳優賞を受賞。

④『二泉映月』（浙江省小百花越劇団）

〈あらすじ〉

二胡の名曲「二泉映月」を作曲した中国民間音楽家・華彦鈞（阿炳）の人生を描く。民国初年、無錫の茶館では毎夜にぎやかに芸人たちが集っている。中でも胡弓の名手、道士の阿炳は人気の的で、良家の陸天佑の嫉妬を買う。2人は道教の音楽家である阿炳の父に学ぶライバル同士なのだ。「私生児のくせに！」という陸天佑の雑言に、阿炳は父を問いただす。妓女だった母は結婚を拒まれ、生まれたばかりの自分を父の元に預け湖に身を投げたと知らされる。真相を知った阿炳は寺を捨てて出奔し、妓楼でアヘンに溺れる生活を送り、放蕩のために失明する。気まぐれに身請けした妓楼の下女・董催弟が、何度も音楽を捨てようとする彼を支える。やがて抗日戦争がはじまるとき、従軍するライバルたちに置いて行かれる疎外感に、彼の苦悩の日々は続く。

陸天佑の戦死が伝えられると、阿炳はともに修行時代を過ごした懐かしの寺にもどる。そこで両親が自分に託した深い期待と愛を知り、ようやく自分にとっては音楽こそが至高の価値を持つのだと気づく。母の暖かさを思い、これまでの苦悩を吐露すると、魂は解脱する。まさにその時、あの名曲「二泉映月」が生まれたのであった。

〈所感〉

「おかあさん、どこにいるの？」「お月さまにいるわよ」という会話で幕が開く。父親から引き継がれる音楽の才、「私生児」の烙印、父に反抗して家出、花柳界におぼれ性病で失明。女に支えられる芸人暮らし、盲目ゆえに従軍もできず、引け目と自己嫌悪の日々。亡き母への愛着は寺山修司の世界をほうふつとさせる。ライバルの戦死、託された亡父の楽譜と母の手紙、解脱、心から湧き出る音楽と名曲の誕生。

劇中には表題曲以外にも多くの二胡や琵琶の名曲が流れて耳を楽しませてくれ、黒メガネと白衣装の茅威濤が一幅の絵としてたいへん美しい（写真④）。だが、ひたすら後ろ向きのマザコン男阿炳には共感も同情も湧かない。それに反して、董催弟役の陳輝玲の表情には引き込まれ、一級俳優の実力を感じさせた。日本軍による侵略がきっかけで、転落の一途だった主人公のストーリーが転

がり出す。抗日エピソードが語られるたびに拍手が起きていた。

〈備考〉

無料パンフレットは1枚もののチラシだけ。だが、劇団30周年のDVDセット200元、茅威濤の阿炳姿がプリントされたクリアファイルを1枚20元で販売していた。購買者には「北京青年週報 浙江省小百花越劇団特集」(10元)が無料配布される。冊子の裏面広告はカルティエで、高級感が醸し出されている。茅威濤が優秀俳優賞を受賞。

⑤『董小宛与冒辟疆』(南通芸術劇院越劇団)

〈あらすじ〉

明末清初の社会変革次期、歌妓・董小宛は貴公子・冒辟疆と愛し合い、2人で故郷に帰る。冒家では身分の違いから姑にいじめられるが、彼女はけっして恨まず、にこやかに冷遇に耐える。王朝交代の動乱から逃げ回る最中にも彼女1人が家族から捨て置かれるが、家族の帰宅を信じて家を守る。新王朝に勤務する冒辟疆がストレスから床に就くと、董小宛は連日連夜の看護で体を壊し、ついには血を吐き倒れる。彼女の献身に感動した姑は、家の名にふさわしい立派な結婚式をあげてやろうと言う。だがまさにその時、董小宛は看病疲れからこの世を去り、冒辟疆は彼女を抱きしめ、生涯の愛を誓う。

〈所感〉

身分違いの男を手に入れる方法は、男の言葉を信じてひたすら待つこと。そして周囲を味方につけること。美しい妓女が貞淑をアピールすると、男は手中に落ちて離れられなくなる。冒辟疆は、かつて他の妓女との恋愛で、結婚話を破談にして恥をかいた経験を持っている。そのため姑は「今度もまたか」と董小宛を家に入れることに反対していた。だが彼女の身の上を知ると同情し、さらには息子や娘をはじめとして召使い全員が膝まづいて願う様子に圧倒されて同居を認める。「式を挙げるまでは別居せよ」の言葉に息子はショックを受けるが、彼女は「すでに私は彼のものですから」と動じない。

本来身分の低い女性が男性に献身を尽くす純愛物語のはずなのに、美しくか弱い女性ほど実は手ごわいという物語に見えててしまう。また、すでに一緒に暮らしているのに、「盛大な結婚式を挙げ、正式な嫁になる」ことを重要視する台本に違和感を持つ。人間の平等をテーマとするにしては、物語が小さすぎると感じた。

クライマックスでは冒辟疆が、董小宛のために薬草を探して雪山に入る。彼女への一途な思いを熱唱するが、雪を降らせる機械の轟音が邪魔をしていた。

台本は著名劇作家、羅懷臻による。80年代から「伝統戯曲の現代化」と「地方戯曲の都市化」をテーマに多数の劇種で新作を発表してきた人物である。准劇『金龍と蜉蝣』、昆劇『班昭』、甬劇『典妻』は中国戯曲学会が選ぶ当代百種曲にもおさめられている。中国戯劇家協会副主席、上海戯劇学院と中国戯曲学院でも教鞭をとる、上海インテリ界を代表する実力者である。

⑥『探春』（余姚市芸術劇院）

〈あらすじ〉

探春は才色兼備だが棘があり、大觀園の薔薇の花とよばれているが、高い志を持つ女性である。その才能を評価され、身重の鳳姐に代わり賈家の管理を任せられた。緩んだ家の者たちを厳しく管理し家計を引き締めようとはりきる。が、その彼女を金の無心で悩ませるのが実母の趙姨娘である。賈家人々の前でだらしない姿を見せて、彼女の足を引っ張る。ちょうどその時大觀園で窃盗事件が起き、彼女の管理能力が試される。この家に自分の居場所を確保しようと頑張る彼女だが、やがて海の向こうに嫁入りが決められ、賈家人々に別れを告げる。

〈所感〉

「紅樓夢」の中から探春を主人公にした新編作品。探春は妾腹のために、賈家では肩身がせまく居心地が悪い。家族だけでなく、召使いにも軽く扱われているのではないかと常に人の顔色をうかがい、のびのび暮らせない辛さを味わっている³⁾。だからこそ、この家に自分の力で居場所を確保しようと頑張る。だが母は自分を疎ましく思う娘の態度が気に入らない。「いったい誰が生んでくれたと思っているのだ！」と家庭内で地位を得た娘に特別な配慮を期待し、強要する。

最終幕、遠くに嫁ぐ探春はこれまでずっと「おばさま（姨娘）」と呼んでいた母を初めて「お母さん」と呼び、抱き合う。原作「紅樓夢」では文化果つる辺境への嫁入りが哀れを誘うが、ここでは悲しみだけではなく、将来への希望を感じさせるエンディングが用意された。

実母の趙姨娘も一変して落ち着いた雰囲気になり、母と娘のわだかまりは消え、あたかもこれまでの人生にかたをつけたようなすがすがしさである。新しい人生の扉を開けようとする探春のりりしさと彼女への祝福が感じられる。「人間到る処に青山在り」と感じさせるのは、女性演出家の意図だろうか。

賈家にとってのよそ者という意味では、賈探春と黛玉の立場はよく似ている。越劇の四大古典作品のひとつ「紅樓夢」（1952年、徐進作）では、周囲の視線を過敏に受け止める黛玉も常に身を縮めて生きていた。社会の縮図である大觀園に住む人々の中で越劇作品がこの2人に焦点を当てるのは、女性観客の共感を考えた作家の慧眼と言えるだろう。全体に暗いムードの漂う中、こづるい中年女中たちのコミカルな演技が光っていた。

〈備考〉

演出は浙江小百花越劇団『二泉映月』で天佑役を務めた江謠である。私生活では、夫君の周正平は、楊小青演出作品には欠かせない著名な照明家である。江謠は茅威濤が楊小青と別れた後の最初の作品『琵琶記』で脚光を浴び、一級俳優となった。

⑦『摂政王之恋』（杭州越劇院）

〈あらすじ〉

ドルゴンは金國ヌルハチの第14皇子で、3代の皇帝に仕えた実在の名摂政である。宮廷での跡目争い、愛情争いに翻弄された母はヌルハチに殉死する。ドルゴン自身は皇帝の位も愛する人も20歳上の兄、皇太極に奪われるが、逆境の中で明を滅ぼして清の国作りに功績を立てる。彼は皇太后

になった大玉児への純愛を抱き続けながらも、自分は皇帝になることなく補佐役に甘んじた。皇太極の死後、ようやく彼女にプロポーズをするが、思いがけず拒否される。さらに彼女は自分の息子・福臨に皇位を継がせるために摂政となるように求め、ドルゴンは自分を押し殺してその願いを受け入れる。だが成長した福臨は自分を粗略に扱うドルゴンに不満を抱く。やがてドルゴンは福臨派の毒矢に倒れ、大玉児との思い出の場で、彼女の胸に抱かれて息を引き取る。

〈所感〉

「度重なる不運にひたすら耐える誠実なドルゴン役は、陳雪萍にぴったり」と演出家の楊小青が語っていた。純愛一筋に見えたドルゴンが皇帝の位と恋人への執着を吐露し、大玉児に恋人の自分と息子のどちらを取るのかと自問自答するアカペラシーンが秀逸である。1幕では生き生きとドルゴンへの恋心を語っていた大玉児が、5幕では能面のような表情でこう語る。「降嫁は嫌。自分の息子に皇位を継がせたい。あなたには福臨を支えてほしい」。変わってしまった恋人の心を知り、ドルゴンは叫ぶ。「なぜだ？！」。これまで蓋をしてきたドルゴンの欲望がこぼれ出る、「私だって皇帝になりたい！」。

『陳香蓮』をはじめ、中国の伝統劇に心変わりをする男性の物語は数多い。だからこそ、出世や私欲で糟糠の妻を捨てたりしない男と女の純愛を描く越劇作品が女性観客の心をつかんできたのだろう。だが、人は変わるのである。男性だけでなく、女性も変わるのである。娘から母へと変わっていく女性にとって、いつまでも恋人への純愛だけを心に抱いて生きることはできない。大人の女性のための越劇作品誕生である⁴⁾。

陳雪萍の声の調子が悪かったために大賞を逃して、大変残念だった。だが謝群英とともに50代とは思えぬ若々しい美貌に驚かされる（写真⑦）。ぜひもう一度最高のコンディションで見てみたい。謝群英が優秀俳優賞を受賞した。

〈備考〉

1940年代の範派作品のリメイクである。これまで折子戯では呉鳳花も演じたことがあったが、全編上演は今回の杭州越劇院が初めてだという。パンフレットには本作を復活させた劇団に対する範瑞娟の感謝の言葉が付されている。近年、杭州越劇院の活躍は目覚ましい⁵⁾。侯軍院長の指導のもと、イプセンの『ヘッダ・ガブラー』を中国化した『心比天高』、『ジェーン・エア』、『班昭』など常に新しい模索を続けている。最近では上海越劇院から徐派のスター鄭國鳳（1966年生）を引き抜き、『紅樓夢』在上海で上演した。上海越劇院には同じ徐派の先輩スター錢慧麗（1963年生）がおり、彼女がいる限り宝玉役は鄭國鳳には回ってこない状態だった。「ようやく鄭の宝玉を見ることができた」と上海のファンを大喜びさせた。

⑧『步步惊心』（浙江藝術職業学院・浙江小百花越劇団）

〈あらすじ〉

交通事故に遭ったOLの張曉が目を覚ますと、清朝康熙年間にタイムスリップしていた。若曦という名で、後宮の女官になっていたのだ。彼女は選抜試験を次々と勝ち抜き、後宮での出世を果たす。と同時に、9人の王子たちによる宮廷の後継者争いに巻き込まれていく。さらに若曦は四爺

(雍正)と八爺を相手にラブストーリーを繰り広げて、最後には彼女の死が雍正の心に深い傷を与える。

〈所感〉

もともと桐華の小説が2011年にテレビドラマ化されて大ヒット。その作品を女性作家錢珏が越劇化した。役者はみな若く、美しい。ドラマの人気もあり、会場は老若男女で満席。だが、両方を見た観客からは「ドラマほど面白くない。重い」との声が上がっていた。

舞台は終始、紫禁城を表す赤い壁に囲まれている。それが役者一人ひとりの魅力を消してしまうほどの重苦しさを感じさせる。これこそが演出家郭小男の意図だろうが、せっかく浙江芸術職業学院の学生と浙江小百花越劇団の若手メンバーで作る作品なのだから、原作が持つ若さや明るさを生かしたものを見たかった。

日本がそうであるように、今後は中国演劇の世界でもライトノベルのような作品が増えていくだろう。若い読者を惹きつけた原作の魅力を損なわないような舞台化が望まれる。

〈備考〉

本作最大の見どころは俳優陣の若さ、美しさであろう。当日のチラシは主要3人（李雲霄、陳麗君、董靜）の上半身写真だが、総合パンフレットには四爺役の陳麗君1人だけが全身写真で掲載されている（写真⑧）。その華麗な姿は、宝塚のトップスターを想起させ、特筆に値する。茅威濤が芸術総監督としてチラシに名前を連ねていた。

⑨『屈原』（紹興小百花越劇団）

〈あらすじ〉

楚国振興という偉業のために、左徒・屈原は国内改革を推し進めている。国外に対しては斎国と合従し、大国の秦に対抗しようとした。そのために、彼は法律を改め風紀を引き締め、内政に非凡な才能を発揮する。秦の大臣・張儀は秦に服従せよと主張し、繰り返し楚と斎の連盟を妨害し、南后をたぶらかし、楚の懷王をだまし、讒言を用いて屈原を陥れる。逆境の中、屈原は寺に幽閉されながらも天下を憂い、自分の理想を堅持する。楚国の失政、官僚の腐敗、貴族階級の貪婪を批判し、楚の懷王に進言する。だが懷王が怒るだけで戦わず、恨むだけで自分の心を察せず、自分を登用しなかったことを悲しみ、国の亡びることを悲嘆する。だが楚の滅亡に際しても国を離れず、王への忠誠を示す。彼の志は弟子たちに継承される。

〈所感〉

見終わったあとに、感動で心地よい疲労感に襲われた。今回見た中で、間違いなくトップ3に入る作品である。中でも、北と南の獄につながれた楚王と屈原が並んで掛け合いで歌うシーンが秀逸である。楚王「屈原の言葉を信じなかった自分が恥ずかしい」。屈原「民の苦しみに、人間としてどうするべきかを考えてくれなかったのが残念だ」。空間を越え、他国にいる相手と肩を並べて互いへの思いを歌うシーンは、中国演劇で言われる「写意」の表現であろうか。

パンフレットとチラシは、全面がひげをつけた吳鳳花のアップ写真である（写真⑨）。老生が主役になる越劇作品は数少なく、しかもそれを小生の大スターが演じるという意欲作。女弟子に人間

はどうあるべきかをやさしく説き示す屈原を、呉鳳花が父性あふれる魅力的な男性として表現し、女性観客の期待に応えてくれた。息子を守るために屈原を殺そうとする南后役の呉素英も、きつい悪女役を好演していた。周正平の冴えた照明も特筆しておきたい。

〈備考〉

開幕式直前に本作がコンテストの審査対象から外され、関係者に衝撃が走った。コンクールの公平を期すために、作家が所属する単位が主催するコンテストには参加できないというルールが本フェスティバル直前にできたのだ。作家呂育忠が文化部所属のために、『屈原』が「審査作品」から「参加作品」に替えられたという。これは全国規模のフェスティバルで大きな賞を取るために予算と時間をかけてきた劇団にとって大打撃である。また、呉鳳花に優秀賞を取らせたいファンにとつても黙認できない一大事であり、関係者には問い合わせの電話が鳴り続けた。

作家王蒙が文化部大臣であったように、中国では官僚が作家を兼ねるのはしばしば見られることだ。今後多くのフェスティバルで同じ事態が出来するのではないだろうか。

⑩『双獅図』（平陽小百花越劇団）

明朝、宰相・張永泰は同僚の趙天龍を罪に陥れ、彼の私蔵する国宝「双獅図」を手に入れようとする。趙の息子・趙雲貴は絵図を持って逃走し、誤って張永泰の屋敷に逃げ込んでしまう。張の息子張友義と娘・幼梅に助けられた彼は幼梅と婚約する。真相を知った子供たちはなんとか趙雲貴を助けようとするが、父親の追っ手に阻まれ彼をかばった張友義が捕えられる。法廷で対面した父親は自分の息子を裁けるのか。処刑される寸前、幼梅が法廷に飛び込み兄の冤罪を訴える。張友義は父の横暴を諫め、父は自分の非を認めて大團円となる。

〈所感〉

父「お前のために伝家の宝を手に入れてやりたかった」。息子「そんなものは要らない。一緒に家に帰ろう」。家族のために立身出世を望み、その結果家族を失いかける父親の姿が現代的である。父親が双獅図に執着したのは、2頭の獅子に自分と息子の姿を投影していたからだったのかと、エピローグを見てようやく気づいた。越劇には珍しい、父と息子の物語である。

趙雲貴役の蘇素雲が強烈な印象を与える。下町の庶民顔で、いかにも田舎の旅回り役者といった容貌だが、歌がうまいだけでなく彼女の一拳手一投足に爆笑が沸き起こる。平陽の上沼恵美子か藤山直美かという存在感である。パンフレットには醜角（道化役）の国家一級俳優で、「天性の喜劇細胞を持っている」とある（写真⑩）。才子佳人物語を得意とする越劇で、道化役の国家一級俳優とは異色のスターと言えよう。越劇にこんな怪優がいたとは嬉しい驚きだ。彼女も優秀俳優賞を受賞した。

⑪『章綸』（樂清市戯曲芸術伝承展演中心）

〈あらすじ〉

ご土地の英雄を題材にした純愛もので、史実に基づいた物語とされる。科挙受験の途上、樂清に立ち寄った章綸が名家の令嬢・朱王鳳に一目惚れ。親も喜んで婚約が成立する。めでたく科挙に合

格するが、横暴な皇帝に箴言して退けられ、百叩きの刑に合う。殴り殺される大臣たちがいる中、章綸は親友が送ってくれた賄賂のおかげで野外牢での終身刑に減刑され、瓦に鎖で詩を彫りつける日々を送る。いつまでも朱王鳳を待たせるのは忍びないと離婚状を書くが、驚いて駆けつけた彼女は一生待っていると告げ、2人は生涯の愛をかたく誓う。その後、朱王鳳は泣きすぎたあまりに失明する。皇帝の代替わりで出獄がかなった章綸は喜び勇んで結婚式を行うが、実家から送られてきたのは朱王鳳の双子の妹だった。彼女は盲目の自分がいては夫の出世の妨げになる、と身を引いたのだ。妹を親友と結婚させ、章綸は失踪した朱王鳳を探して、名医がいるという地元の名所雁蕩山へと向かう。清水で目を洗う彼女と再会し、「もう都へは行かない。ここであなたの治療を助ける」という章綸の言葉で大団円を迎える。

〈所感〉

章綸は5世紀、楽清の人。有名な名臣。楽清市は温州から高速道路で1時間の距離にある。車が遅れて1幕途中から入場すると、筆者の席にはすでに誰かが座っている。場内係は配置されているが、厳しくは注意しない。空席を見つけると、少しでも良い席に移動する習慣がここではまだ堂々と生きている。

愛し合う2人が冤罪により引き裂かれるが女は待ち続ける。だが、男が出世すると病を得た女は自ら身を引く。男は約束を守って一途に女を愛し、すべてを捨てて彼女と暮らす。新編作品だが、越劇の王道のような純愛物語で、これまで温州で見てきた作品の斬新さとはまったく別物である（写真⑪）。お年寄りを中心に若いファンも多く、場内はほぼ満席。俳優もうまく、観客は熱心で、拍手が暖かい。前の席のおばあさんがしきりに涙をぬぐっており、越劇が大衆の娯楽として生きていることがよく分かった。章綸役の李美鳳が優秀俳優賞を受賞。

II. 動向分析と考察

第3回中国越劇芸術節参加作品から、以下の特徴を読み取ることができた。

1. 越劇第二世代の活躍

今回、第二世代と呼ばれる、80年代にデビューをした俳優たちの活躍が目立った。温州市越劇団の鄭曼莉、杭州越劇院の陳雪萍・謝群英、紹興小百花越劇団の吳鳳花・吳素英らはみな50歳前後（1960年代生）で茅威濤と同世代、国家一級俳優や梅花賞受賞の称号を持つ実力者である。浙江越劇を代表する3劇団があえて彼女らの年齢を生かした新作を創っていることが、大きな特徴といえよう。その結果、これまでとは異なる「大人の越劇作品」が生まれていた。

女性だけで演じるために、越劇はしばしば「中国の宝塚」と呼ばれる。だが宝塚歌劇団と異なり、越劇には結婚で退団するという規則はない。プロの俳優としてのキャリアに1人の女性としての実人生が加わり、さらに深みを増した演技を見ることができる。それが宝塚歌劇団との大きな差で、越劇の優位な点であることを見せつけられた。

1920年代に貧しい浙江省の村で生まれた女の子たちにとって、越劇女優という職業は生きるた

めの選択肢を増やしてくれた。だがラブロマンスが中心の作品では、若さと美貌がなにより優先され、俳優として最も円熟した時期には舞台に立てなくなる。そのために、女優という仕事は一生の職業とはならず、彼女らにとってはやはり結婚が人生最良の結末だった。だが今回、年齢にふさわしい作品に恵まれることで、彼女らは本来の小生から老生へ、老生から老旦へと挑戦し、表現者としての新たな扉を開いたと言えよう。その意味では、袁雪芬たちが望んだ、女性の一生の仕事としての越劇女優という職業が、今ようやく成立したといえるのではないだろうか。彼女らにそのチャンスを与えた『大唐驪歌』『摶政王之恋』『屈原』のいずれもが楊小青演出によるものであることを明記しておきたい。

2. 新しいテーマ

今回の新作では男女間の恋愛をテーマにしたものよりも、新しい親子関係をテーマに描くものが目に付いた。その代表は『大唐驪歌』である。演出の楊小青は越劇でも恋愛以外の多様な人間関係を表現してきた⁶⁾。昆劇『班昭』の越劇化にあえて挑戦したのも、越劇でも女性の事業を主題とする作品が描けることを示そうとしたのであろう⁷⁾。

『西廂記』(1992)以来、詩化越劇と称された楊派越劇は着実に自分のフィールドを広げてきた。俳優の力だけではなく、照明・音楽・舞台美術・衣装などのハーモニーによって女性の成長に伴うすべてのできごと——変わることのない純愛も、変わりゆく心も、大人の悩みも、人間の欲望も——すべてが高い芸術レベルで表現できるようになったのだと感じさせる。

また、『賀双卿』『海蘭花』『探春』『双獅図』でも、大きなテーマとして母と娘、父と息子の関係が横たわっている。それらはいずれも女性の立場から共感できる親子関係だった。ただ『二泉映月』だけが違和感を残した。作演出の郭小男は観客の共感よりも茅威濤を通して自分自身を表現することを優先しているのではないだろうか。

3. 新しい題材

テレビドラマの影響で、清朝もの（辯髪もの）が増加している。8年前の第1回越劇節では1本もなかったが、今回は『摶政王之恋』『步步惊心』『甄嬛 上・下』（上海越劇院）の4本が上演された。越劇関係のブログを読むと、ごひいきスターの辯髪に嫌悪感を示すファンもいるが、逆に「清朝の衣装がカッコいい」と惚れ込むファンもいる。『ジェーン・エア』や『椿姫』の西洋ものと同じく、初めは違和感を持たれたのだろう。だが2013年の『甄嬛』（上海越劇院、李莉作・楊小青演出）の大ヒット以来、清朝ものは急速に人気を集めている。今後も新編越劇の題材の宝庫となりそうである。

4. 新しい男役

筆者はかつて第1回越劇節の問題点として越劇男優の不足を挙げた⁸⁾。主役をはれる男小生と言えば趙志剛だけで、「いっそのこと宝塚のように格好のいい女優を抜擢することはできないものか」と書いたが、それが現実となった。浙江芸術職業学院の『步步惊心』（写真⑧）である。陳麗君を

はじめ、小顔・高身長・長い手足の若きスターたちに、清朝のあざやかな衣装がたいへんよく似合う。辯髪のイケメン王子たちが次々に登場して目を楽しませてくれる本作は、新しい男役アイドル時代の到来を感じさせた。

5. 茅威濤と楊小青が表すもの

今回も楊小青の活躍は目覚ましい。開幕式、『大唐驪歌』、『董小宛与冒辟疆』、『摶政王之恋』、『屈原』、『陸羽問茶』（余杭小百花越劇藝術中心）、『甄嬛』、『閉幕式・越劇流派名家演唱會』の演出を担った。実際には各劇団に所属する若手演出家を指導しながらも、プログラムから自分の名前を外している作品も多いという。これは越劇界に彼女に代わる演出家がまだ生まれていないことを示すエピソードであるが、彼女が次世代の人材を育成していることも示している。

一方、茅威濤は2013年にはブレヒトの『セチュアンの善人』を翻案した『江南好人』で現代装を、2014年には『二泉映月』でサングラスの白衣を披露し、話題作品を創り続けている。だが問題は、話題が作品の評価に結び付かないことと浙江省小百花越劇団では彼女以外のスターが育成されないことがある。今回の『二泉映月』でも、茅威濤だけが優秀賞を受賞したように、他の劇団ならば問題なく主演をはる実力を持つ俳優も、ここでは彼女の影にかくれるしかない。

現在浙江越劇の優秀作品の多くが楊小青の手によって生み出されていることは衆目の一致するところである。だが、「1人の演出家が劇種を代表することなどできない」（張思聰）のであり、劇種を代表するのはやはり名優である。越劇の場合、それは全国人民大会代表、中国戲劇家協会副主席、浙江省小百花越劇団團長の大スター茅威濤にほかならない。しかし、その彼女が夫君郭小男とともに唯我独尊の道を歩んでいるために、越劇を代表する大スターが現在の越劇シーンを代表しているとは言えない状況が生まれている。

今後も楊小青・茅威濤の2人が合作することはないであろう。そうであれば、そのねじれ現象こそが浙江越劇の多様性を生む原動力だと考えるべきなのかもしれない。

おわりに

閉幕式でコンテスト結果が発表された。『大唐驪歌』、『二泉映月』、『沙漠王子』（福建省芳華越劇団）など6劇目が優秀作品賞を受賞し、黃燕舞や茅威濤ら12名が優秀俳優賞を受賞した。そこには『屈原』も呉鳳花の名前もない。コンテストに参加するということは、歴史に名前を残すということだと気づいたとき、関係者の無念さに心が痛む。またコンテスト結果だけを信用していては、素晴らしい作品を見逃すこともあるのだということに気づかされた。

「越劇が中国第二の劇種を誇れる理由は、チケットが売れるからだ」（譚志湘）という。その意味において、今回のフェスティバルは、越劇が今も自立する劇種として演劇界に誇れる地位を示す機会となった。温都新聞（2014年10月28日）によると「以前はタダ券を配っても劇場はガラガラ。今では市民が争ってチケットを購入し、いずれも9割を超える売り上げ」だったという。

温州の観客は上海のようにひとりのスターに熱狂するのではなく、芝居そのものを楽しんでい

た。ここでは今も芝居が娯楽の王道として生きているのだ。さすが南戯を生んだ土地柄である。

注釈

- 1) 中山文・細井尚子「2006年中国越劇藝術節報告」『人間文化』22号 2007
- 2) 中山文・杉山太郎「建国50周年の中国演劇状況について－1999年北京の舞台から」『中国研究月報』632号 2000
- 3) 探春と母の関係については、山村幸枝「『紅樓夢』における探春の特殊性について」『金沢大学中国語中国文学紀要』2 1988 を参考にした。
- 4) ドルゴンの人物像については、井上祐美子『海東青 摂政王ドルゴン』中央公論新社 2000 を参考にした。
- 5) 中山文「杭州越劇院改革の道－侯軍院長聞く」『幕』61号 2005
- 6) 中山文「楊小青と越劇の60年」『中国21』vol.20 2004
- 7) 中山文・伊藤茂「从昆剧《班昭》到越剧《班昭》」『粉墨丹青－楊小青导演艺术』中国戏剧出版社 2012
- 8) 同(1) p187

(本論文は2014年度人文学部研究推進費による研究の一部である)

資料1 作品データ一覧

86

廿二 文

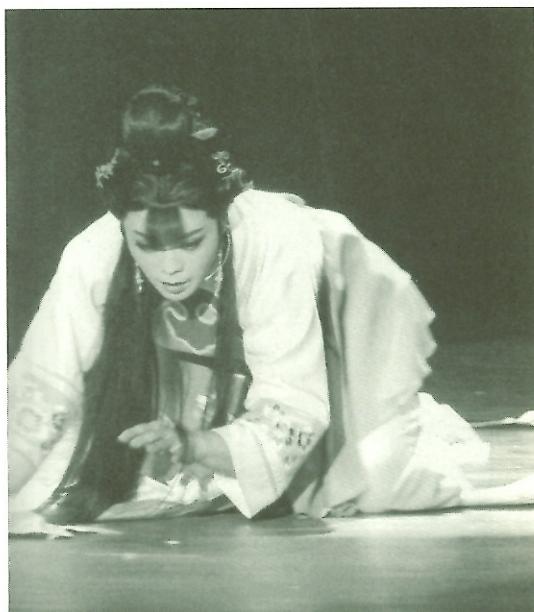
日時	題目	劇團	編劇(創作)	導演(演出)	主要演員	劇場
10月12日 19:30	新編越劇《六臂哪吒》 (越劇芸術節開幕式)	溫州市越劇演藝中心 (溫州市越劇團)	張思聰	楊小青 丁漢平	黃燕舞 邵夢嵐 鄭曼莉	溫州大劇院
10月13日 14:00	新編古裝越劇《賀及卿》	福鼎市閩浙邊界文化藝術交流中心 (福鼎市越劇團)	姚曉群	展敏	吳丹萍 王麗亞 戴雅紅	鹿城文化中心
10月13日 19:30	大型原創現代越劇《海蘭花》	舟山市芸術劇院·小百花越劇團	楊東標	俞克平	劉雨燕 沈利兵 張紅梅 東彩珍	溫州東南劇院
10月14日 19:30	新編越劇《二泉映月》	浙江小小百花越劇團	郭小男 羅開	郭小男	茅威涛 江瑤 陳輝玲 吳春燕	溫州大劇院
10月14日 19:30	大型原創越劇《沈光文》	寧波市鄞州区越劇團有限公司	張勇	俞克平	陳鯉 鄭燕 劉婕 余冬亞	柒清劇院
10月15日 19:30	新編越劇《董小宛与冒辟疆》	南通芸術學院越劇團	羅懷臻	楊小青	范曉萍 徐柳飛	鹿城文化中心
10月16日 14:00	新編越劇《探春》	余姚市芸術學院越劇團演	陸軍 薛允璜	江瑤	叶奇芳 孫海平 俞雅華	溫州東南劇院
10月16日 19:30	大型越劇《攝政王之恋》	杭州越劇院	楊銳	楊小青	虞雪萍 謝群英 叶惠萍	溫州大劇院
10月17日 19:30	穿·越劇《步步惊心》	浙江芸術職業學院	錢珏	郭小男	陳麗君 向青青 董靜	鹿城文化中心
10月17日 19:30	新編越劇歷史故事劇《清箇獎榮》	浙江弘影·常山越劇團	陳偉龍 居志勝	金鎖媛	姜新花 李小慶 鄭元美	柒清劇院
10月18日 19:30	新編歷史劇《屈原》	紹興小百花越劇團	呂育忠	楊小青	吳麗花 楊懿琴 吳素英	溫州大劇院
10月18日 19:30	青春國戲·越劇《牡丹亭》	中國戲曲學院	顏全毅	王永慶	吳俊萍 張琳 單鑒鴻 陳夢薇	溫州大學劇院(茶山校區育英大礼堂)
10月19日 14:00	新版專治越劇《双瓣園》	平陽縣小百花越劇團	施小琴	翁國生	藍素云 劉志霞 项逢玲	溫州東南劇院
10月19日 19:30	新編歷史劇《章緯》	樂清市藝術表演藝術中心 (樂清越劇團)	湯琴	何双林	李美鳳 周妙利 吳魯錦	柒清劇院
10月20日 19:30	青春越劇版《沙漠王子》	福建省芳華越劇團演	陳曼	徐建莉	徐偉敏 張倩倩 沈敏 方曉雲	溫州大劇院
10月21日 14:00	大型現代越劇《馬寅初》	嵊州市越劇團保護傳承中心 (嵊州市越劇團)	姜朝舉	韓劍英	張健忠 黃美鴉 聖巧芳 倪錦鏘	溫州大學劇院(茶山校區育英大礼堂)
10月21日 19:30	新編六場傳奇越劇《陸羽問茶》	杭州市余杭小百花越劇藝術中心	譚均華 孟華	楊小青	費鑫萍 洪燕琴 俞巧麗	溫州東南劇院
10月22日 19:30	越劇現代戲《我的娘姨我的娘》	浙江越劇團	余青峰	盧昂	王濟海 鄭莉莉 陳海強	溫州大劇院
10月23日 14:00	新編大型越劇《十里紅妝·風雨情》	寧海縣小百花越劇團	楊東標	江瑤	潘巧巧 錢菊紅 戴華君	鹿城文化中心
10月23日 19:30	新編越劇《鳳姐》	寧波市小百花越劇有限公司	謝麗泓	李利宏	謝進聯 孫琴 徐曉飛	溫州東南劇院
10月24日 19:30	現代越劇《丁香》	南京市越劇團有限公司	羅周	翁國生	章琪 徐標新 王子鑑 湯達	溫州大學劇院(茶山校區育英大礼堂)
10月25日 19:30	大型古裝越劇《甄嬛》(上本)	上海越劇院	李莉(總編劇) 黃燦	楊小青	李旭丹 楊婷娜 張宇峰 史燕彬	溫州大劇院
10月25日 19:30	新編歷史劇《高則誠》	瑞安市越劇有限公司	金耘	黃良成	王曉聰 鄭丹和 王婕	柒清劇院
10月26日 19:30	大型古裝越劇《甄嬛》(下本)	上海越劇院	李莉(總編劇) 黃燦	楊小青	沈琳 張如丹 郭真每	柒清劇院
10月27日 19:30	大型古裝越劇《秀芳》	溫州市藝術研究院	羅懷臻	熊原偉	王志萍 錢惠麗 黃燦 蔡曉秋 方汝將 周妙莉	溫州東南劇院
10月28日 19:30	第3回中國越劇節閉幕式 藝術節組委會	中國越劇流派名家演唱會				溫州大劇院

資料2 上演作品舞台写真

①は楊小青氏提供。それ以外は一般配布用パンフレット・チラシ、審査委員用総合パンフレット（譚志湘氏提供）より。パンフレット表紙が文字だけのものは、舞台の様子がわかる写真を優先した。



①『大唐驪歌』（温州越劇団）



②『賀双卿』（福鼎市越劇団）（総合パンフレット）



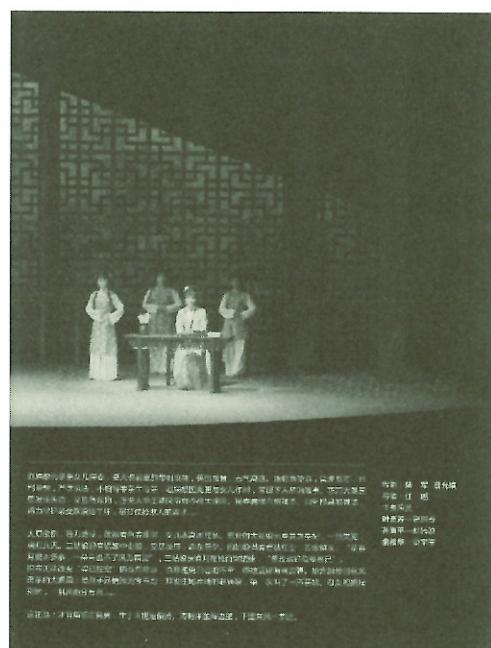
③『海蘭花』(舟山市芸術劇院・小百花越劇団) (総合パンフレット)



④『二泉映月』(浙江省小百花越劇団) (チラシ)



⑤「董小宛与冒辟疆」(南通芸術劇院越劇団) (総合パンフレット)



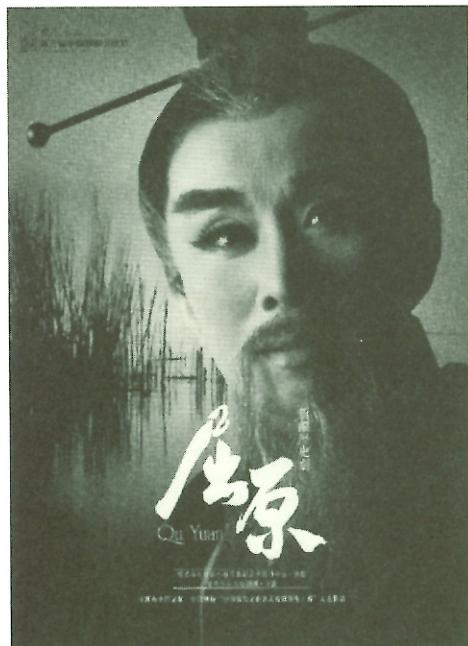
⑥『探春』(余姚市芸術劇院) (総合パンフレット)



⑦『摂政王之恋』(杭州越劇院) (総合パンフレット)



⑧『步步惊心』(浙江藝術職業學院・浙江小百花越劇団) (総合パンフレット)



⑨『屈原』(紹興小百花越劇団) (総合パンフレット)



⑩『双獅図』(東南劇院平陽小百花) (一般用パンフレット)



⑪「章綸」(樂清市戲曲藝術伝承展演中心)
(一般用パンフレット)

資料3 上演劇場写真



温州大劇院



鹿城文化センター



東南劇院



樂清劇院